

## いの町史編さん室だより(No.6)

「いの町史編さん室だより」は今回で6回目になります。毎回、町史編さん作業で知り得たことや体験したことなどを町民の皆さんに紹介しておりますが、いかがでしょうか？平成26年の町の合併10周年を目標に「いの町史」の編さんを進めている町史編さん室では、町民の皆さんが参加する町史作りを目指しています。つきましては、町史編さんに役立つと思われる資料・写真などがあれば、ご連絡ください。

それでは、今月のちょっとおもしろい話とちょっとうれしい発見をどうぞ。

### 編さん室からのちょっとおもしろい話

編さん委員 中島美恵子

#### 「発掘日誌 ～2000年の眠りから覚めて～」

バーガ森北斜面遺跡は、いの町字三世庵(さんぜあん)、岩神(いわがみ)、奥名(おくな)に所在し、宇治川左岸に沿った標高50～80mの丘にあります。昭和32年に地元の故・刈谷登喜義、中嶋勝秀両氏らによって山中の数カ所から遺物が発見され、その状況から東西約450m、南北約300mの範囲の中に弥生時代の集落の存在が想定されていました。昭和49年と51年に初めて発掘調査が行われ、弥生時代中期末の住居跡や、土器、石器などが多数見つかり、当時では発掘

事例が少なかった「高地性集落」に位置付けられる遺跡であることが判明しました。特に、昭和49年に発見された竪穴住居跡は非常に残りが良く、翌年に「伊野町指定文化財」として登録されました。その後、平成9年、11年には、町と天王ニュータウンを結ぶ農道建設に伴い発掘調査が行われ、弥生時代中期末の竪穴住居跡や土器が見つかり、高地性集落としての広がりが見られるものとなっています。



発掘現場の三世庵



矢じり



石包丁



炭化堅果類



炭化米

今回の発掘調査は、国道33号高知西バイパス建設工事に伴い、平成22年～24年にかけて道路工事により影響を受ける範囲について発掘調査を実施したものです。三世庵は見晴らしの良い場所で、現在は竹林、直径40～50cmの杉、桧が数十株を超える山林でした。肩や腰などの痛みを耐えながら人力により伐採、開拓した後、斜面が40度近い斜面を発掘するという大変な調査でした。弥生時代の人々と同じ地上に立ち、当時の生活はどうだったのかと2000年昔に思いを馳せながら掘りました。その結果、谷部の調査では階段状に造成された平らな部分が4段、それぞれの段で直径3～6mの竪穴住居跡が見つかりました。また、周辺では周囲を巡らした柵の跡や、狼煙(のろし)を上げたと思われる炭がいっぱい入った炉跡が多数見つかりました。そこからは、弥生時代の人たちが日常的に使う壺や甕といった土器、農具や工具の石包丁、石斧、鉄斧、武器と思われる石の矢じりや、直径3～5cm大の球形の川原石(投弾として使用)など10,000点を超える遺物が出土しました。土器については南四国独自のものや、バーガ森北斜面遺跡独自の模様があるもの(バーガ森ブランド)、中部瀬戸内の影響を受けた土器が見られたことより、当時の人々は他の地域と活発に交流するかたわら、その土地独自の文化を育てていた様子がうかがえます。特に、鉄斧はその形状から弥生時代の日本で作られたと思われるもので完全な形で出土するのは非常に珍しいとのことでした。

尾根上の調査で見つかった竪穴住居跡では、叩石や砥石

など、矢じりなどの石器を加工するときを使う道具も出土し、仁淀川から運ばれてきた石を加工していた工房のような使われ方をしていたと思われる住居跡も見つかりました。

岩神地区の調査では、弥生時代中期末ごろの食料を保存していた貯蔵穴が見つかり、中には土器の壺と一緒に炭化した米が500g(約4合ほど)と、ドングリのような木の实と一緒に入っていました。弥生時代は米づくりの時代とも言われていますが、当時の稲作文化を知る上で重要な資料となりました。

今回の発掘調査で分かったことは、仁淀川流域、ひいては高知県を代表する非常に大規模な弥生時代の集落がこの地に存在したということです。地元、そして身近な場所にこのような遺跡があることは住民にとっての誇りであり、地域の歴史を知る上で大切なものだと思います。2000年前の遺跡の姿がほんの一瞬でも垣間見えた、そこに立てたことを実感し貴重な遺跡を後世に残せないものかとなってしまうのが残念に思います。

発掘作業中は多数の失敗もありましたが、未知との遭遇に心躍り、高知県埋蔵文化財センターの先生方にはいろいろとお教をいただき勉強することが多く楽しい毎日をお過ごさることができました。3年間に及ぶ発掘調査で体力的にも大変でしたが、貴重な体験となり、一緒に調査した皆さんとのかけがえのない楽しい思い出になりました。最後になりましたが、お世話になった皆さんにお礼申し上げます。